

養子になった我が子に伝えたいこと — 生い立ちの理解を助ける海外の絵本分析を通して —

森 和 子*

Abstract

A picture book is useful in helping a child understand some particular thing. In western countries, it is common to use a picture book to tell the child that he/she is an adoptee in his/her childhood.

The purpose of this paper is to consider what the 'telling' through picture books would be in Japan. After analyzing and comparing picture books published in the United States, with the contents of two similar books recently published in Japan, it became evident that:

- 1) In the infant stage, it is necessary to read the picture book repeatedly to the child even though he/she cannot understand.
- 2) In the childhood, it is desirable that the picture book is read to deepen the understanding of the love and affection on him/her by the people around him/her.
- 3) As he/she grows up, he/she would know the story in the picture book as an objective case. When the truth is informed by the adoptive parents, he/she would start a dialog between the selves before and after the truth is informed.
- 5) Repeated Dialogs may bring him/her a self-acceptance, and make him/her forge an identity. As a result, he/she may have a strong self-affirmation.

Key Words: 養子, 真実告知, 絵本

I. はじめに

幼い頃絵本を読んでもらった経験がある人は多いであろう。絵本は、「おとなが子どものために明確な目的を持って創りあげた『文化財』」(佐々木 1993 : 16) であると言われている。絵本には「読み手が感動した同じ絵本を、聞き手である子どもたちも同じく感動する。いいか

* 人間学部人間福祉学科

えると語り手と聞き手とが、同じ1冊の絵本を楽しみながら結果として共に成長する」（中川2006：27）という大きな可能性をもつという。そして「より複雑なストーリーで構成された物語絵本などは、子どもなりに当面するむつかしい問題を解決をしなければならないときに、頼りになる素敵能力となって、問題解決に役立ってくれ」（岡田1977：39）するという。とりわけ年齢の低い子どもに伝えたい明確な目的がある場合、絵本を用いることは、やがて『人生いかに生きべきか』という人間として、また生活人としての基礎、あるいは基本となる『大切な判断力』（中川2006：39）を養うことができると中川は指摘している。

躰などいろいろな場面で幼い子どもに大人から「伝えたいこと」は絵本を用いて学ばせることは日常的に行われてきたことである。それに対して非日常的な「伝えたいこと」も絵本を用いることによって幼い子どもが理解することを助ける。欧米では養子が幼い時に養子であることの基本的な事実や意味を伝える時に絵本をよく用いている（Cole1995；Miller1994；Thomas2003；庄司2003）。それを日本では真実告知またはテリングという。辞典では「養子に対して、養子である事実を告げること。テリング（telling）」（子どもの人権辞典1996：493）と定義されている。しかし児童福祉の実務家たちによると「お母さんからは生まれていないが、今は私たちが親でああなたは大切な子どもであること」「心から望んで養育していること」（家庭養護促進協会）など養子であるという事実とともに真実の思いも含めて伝えることが真実告知であるといわれている。現在真実告知とテリングがほぼ同義語のように使われる傾向がある。古澤によるとテリングは「非血縁家族において、子どもが産みの親の存在を理解できるように育ての親が行う継続的な試み」（古澤2005：20）と説明している。この試みを『真実告知』と言い切っては、その全貌を示すことにはならない」（古澤2003：2）と危惧する。むしろ story telling（お話し聞きかせ、或いは語り聞きかせ）で使っている“テリング”がかなり現状に近いという。しかしながら本稿においては、公的機関で定着して使用されている真実告知という用語を用いることとする。ただし真実告知は1回だけではなくテリングで言われるような継続的に告知し続けることも意味する。

本研究では、アメリカで出版された真実告知について描かれた絵本の内容分析をし、近年日本でも2冊出版された真実告知について描かれた絵本と比較することにより、日本でも絵本を用いて告知をすることができるようにするため、今後制作が望まれる日本での真実告知絵本の内容の検討と絵本を用いた真実告知のあり方について考察することを目的とする。

Ⅱ．真実告知と絵本

(1) なぜ真実告知が必要か

通常子どもは記憶のない幼い頃の事については、家族から日常会話の中で折りあるごとに話を聞いたり、写真やビデオに撮られた自分を通して理解していくことが多いであろう。養子の場合、養親の元にくるまでの、共に生活していない頃のことを聞く機会や写真などの資料も

少なく自分史について伝えられる情報も極めて少ない。1900年代前半では欧米でも養子であることを秘密にしておくべきであるという考えが一般の常識であった (Wine 1995 : 172)。アメリカでは、これまで子どもが養子になったさまざまな経緯と、それらが子どもに与える影響について多くの議論 (Kroger 2005 : 97) がなされてきている。養子のアイデンティティ形成を困難にする要因として、遺伝や家系についての情報が与えられない事をあげている。「血筋の自我は、自分にはどんな性質が遺伝的に伝えられているかという知識に基づいて形成される」それに対し「養子は、本当の家族的背景を知らないために、その発達が妨げられ、かわりに『遺伝的幻想』 hereditary ghost が生ずる」(鑑他 1996 : 126) ということが明らかになってきた。思春期になって養親と子どもの葛藤に直面した時、子どもは養親より生みの親はもっと良い親なのではないかと幻想を抱くことがある。「多くの子どもは疑問を胸に秘め、一人空想を巡らし、親に話せないまま不安な気持ちを抱きつづけ」(Melina =1992 : 71) なければならないのである。

アメリカでは1990年代に入ると養子・里子の生みの親へのアイデンティティを巡る問題を検討した研究が多くみられるようになり (鑑他 2002 : 107)、秘密にすることは養子のアイデンティティ形成の阻害要因となることがわかってきた。養父母が血縁の父母の情報を子どもに提供することが養子である子どもや青年に対して最も肯定的な成果をもたらす (Kroger 2005 : 97) ということが明らかになっていった。養子が健康的なアイデンティティを獲得することに影響する要因として、信頼にみちた家族関係、養子についてのコミュニケーション、養子であることに対する親の態度をあげている (Hoopes 1990)。欧米のみならず日本でも近年養子当事者からも生みの親の情報を知りたいという要望を表明してきている (Eldridge 1999 ; 家庭養護促進協会 1999 ; 家庭養護促進協会 2006)。

アメリカでの現在の真実告知の状況は、低年齢の時は告知しないという考えの人もある (Watkins & Fisher 1993) が、当然するものという考え方が主流になっている。日本の民間の児童福祉機関では、早くから真実告知の重要性を認識し告知することを強く勧めている (古澤他 1997 ; 岩崎 2001 ; 樂木 2003)。これらの民間の養子斡旋機関で行った調査 (家庭養護促進協会 1984 ; 古澤他 2003) では、6から9割の親子の間で真実告知が行われていることが明らかにされている。小学校入学ころまでに真実告知をすることがのぞましいと言われている (家庭養護促進協会 2007, 絆の会 1997)。早くから研修で真実告知の指導をしている児童相談所の養親たちからの聞き取り調査では、3歳から6歳の間に最初の真実告知をしていたことがわかった (森 2005)。しかしながら日本では告げないでおきたいという風潮が残っているのは事実である (家庭養護促進協会 2004 ; 絆の会 1997)。その理由として、いつ、どのようなことをどのように伝えたらよいかわからないという養親が少なくない (家庭養護促進協会 2006)。特に児童相談所など公的機関で養子縁組をした場合、縁組終了後に児童相談所との関係が切れてしまう場合が多いため、真実告知の情報が得られずきっかけをつかみにくいことも挙げられる (森 2005)。これらを踏まえ、以下で真実告知について描かれたどのような絵本があるのかに

ついて述べる。

(2) 真実告知について描かれた絵本

欧米では、真実告知の理解を助けるために、子どもを迎えた経過や事情などについて描かれた絵本が数多く出版されている。真実告知に関する多くの絵本が一般的な書店でも入手することができる。真実告知について書かれた絵本を用いることにより「繊細なトピックを切りだし、子どもに養子縁組について理解させることを助ける方法として本を使うことができる」(Barr & Carlisle 2003 : 329) と助言している。

アメリカで出版されている本については、インターネットで検索することが出来る。カテゴリーに分けて、絵本を紹介しているサイトがあり、これらはインターネットを通して購入することが出来る。

①一般的な養子のための絵本 (Adoption)

②多民族の子ども、国や種族の違う子ども、肌の色の違う養子 (Multiracial, Race, Skin Color)
文化的多様性について (Cultural Diversity)

黒髪をもった養子 (Black Hair Care)

③国籍別の本 Children's Books By Country

アジア系の養子 (Images of Asian Children (Other))

中国からの養子 (Chinese Adoption)

韓国からの養子 (Korean Adoption)

ベトナムからの養子 (Vietnam Adoption)

東欧からの養子 (Eastern Europe Adoption)

アフリカ系、アフリカ系アメリカ人の養子 (Africa and African American)

エチオピアからの養子 (Ethiopian Adoption)

その他の養子 (other)

一般的な養子縁組についてのことや養子になった理由や経過を書いたもの、また国籍や民族の異なる養子を迎えた家族のための絵本が多く出版されているのがわかる。近年、日本でも日本人によって真実告知について描かれた本が2冊出版されている (はるの 2005, のぐち 2006)。日本語への翻訳本は3冊 (Livingston = 2003 ; Curtis = 1998 ; Shulman=1996) 出版されている。

Ⅲ. 真実告知に関する絵本の分析

Ⅲ-1. 調査方法

(1) 調査目的

本研究では、アメリカで出版された真実告知について描かれた本とその内容を分析し、近年

2冊出版された日本の真実告知について描かれた絵本との比較調査を行った。

(2) 調査対象

調査対象としたのは、2004年から2007年にかけてカナダ、アメリカ、オーストラリアの現地で収集してきた真実告知に関する絵本20冊と、日本人によって作成され、出版されている2冊である。

(3) 研究手法

絵本から書名、作者名、出版年、出版国、頁数、適用年齢、キーワードを抽出した。絵本に表示されているキーワードは、内容の特徴や伝えたいことを表している材料と考え、それぞれの絵本の特徴として取りあげた。さらに、これらの絵本に表現されている情報をすべて抜き出し、Adesman (2004 : 136-142) の「子どもに養子である事を話すときに配慮する8項目」を分析枠組みとして用いた。絵本の機能からみた種類について坂本 (坂本 1977 : 3 - 6) は、以下のように分類している。1. 純粹の絵本 (Picture Book) 2～4歳の幼児に与えるのが適当な絵本で、絵ばかりの本である。ただし描かれているものの名称が文字で書かれている絵本もある。2. 絵物語本 (Picture-story Book) 5～7歳のころに与えるのが適当な、絵と単純な物語とが統合されている絵本である。3. 挿絵本 (Illustrated Book) 8歳以上の子どもに与えるのが適当な挿絵が多い物語の本で、読み言葉で物語を理解しながら、時々読みを止めて挿絵を眺め、読んだ意味を確かめつつ楽しむ本である。今回取り上げた絵本は、真実告知という伝えたい目的をもつ本のため純粹の絵だけの絵本はなく、絵本物語と挿絵本の2種類であった。またすべての本に適用年齢が書いてあったのではないため、記述のなかったものは坂本の機能からみた種類に準じて分類した。

III - 2. 調査結果

アメリカと日本の真実告知絵本については、(1) 書名、(2) 作者名 (作者が養子縁組に関係する人の場合はその旨も記入した)、(3) 出版年、(4) 出版国、(6) 頁数、(7) 適用年齢、(8) キーワード、(9) 絵本の内容を一覧表にまとめた (表1, 2)。以下で、アメリカ、日本の22冊の絵本について分析した数量的および質的結果について述べる。

(1) 書名

9冊がタイトルに養子という言葉が入っている (絵本 No.1, 4, 5, 6, 7, 10, 16, 17, 19)。これらの本を探す時に、Parenting という項目に配置してあった本と一般の絵本の中に無造作にまぎれてあった本もあった。しかし、残りの本の大半は、タイトルに養子縁組という記述はなくても養子家族であることを示唆しているタイトルが多かった。日本の本の1冊は「ふうちゃんのたんじょうび」という題名でタイトルからはわからない。もう1冊は「ほんとうにか

表1 アメリカの真実告知絵本一覧

書名	作者	出版年 出版国 頁数	適用 年齢 (歳)	本の内容	
				Key words	絵本の内容
1. Why Was I Adopted? 「どうして私は養子にな ったの?」	文 Carole Livingston 絵 Arthur Robins	1978 米国 45頁	挿絵 本 8～	Adoption Adoptive parents Birth parents	・養子が質問する形式で養子縁組に 関する養子とは、養親とは、生み の親について説明している。
2. Through Moon and Stars and Night Skies 「月や星、夜空を渡って」	文 Ann Turner 絵 James Graham Hale	1990 米国 31頁	絵物 語本 5～7	Adoption Parent and child	・アジアからアメリカにきた孤児の 男の子が養父母の元で愛情を受け 入れ親子になっていく様子を描い ている。
3. A Mother for Choco 「チョコのお母さん」	文絵 Keiko Kasza	1992 米 国 32頁	絵物 語本 3～7	Mothers Love Bird	・母を捜している鳥のチョコは、熊 のお母さんが泣いているチョコを 家に招き共に暮らすようになり外 見は異なっても母であると感ずる。
4. Let's Talk About It: Adoption 「養子縁組について話し ましょう」	文 Fred Rogers 作者の妹が養子 写真 Jim Judkis	1994 米 国 32頁	絵物 語本 4～8	Adoption Family	・家族の一員であるとはどういうこ とかを説明。 ・養子になった子ども達はどんな思 いをしているかを学ぶ。
5. Did My First Mother Love Me A Story for an Adopted Child 「生んだお母さんは私を 愛していたの?ある養 子のお話」	文 Kathryn Ann Miller 絵 Jmi Moffett	1994 米 国 46頁	絵物 語本 4～8	Adoption Mother and child Letters	・モーガンは手紙を読むことで生み の親の愛と養親の愛を実感する。 ・子どもに養子であることを伝える 際の解説付き。
6. How I Was Adopted Samantha's Story 「どう して私は養子になった かーサマンサの場合ー」	文 Joanna Cole 絵 Maxie Chambliss	1995 米 国 48頁	絵物 語本 4～8	Adoption	・一般的な妊娠中の様子も伝える。 ・養子になった日を親族や友人も招 いて祝っている様子を描く。 ・養子を育てる上での解説付き
7. Happy Adoption Day! 「幸せな養子を迎えた 日」	文 Jahn McCutcheon 作者の友人：養 親 絵 Julie Paschkis	1996 米 国 32頁	絵物 語本 2～6	Adoption Family life Songs	・とても心待ちにしていた子どもが 家族になった日である。 ・「養子になった日」を誕生日とし て親戚友人を交えて祝う。
8. Tell Me Again About The Night I Was Born 「ねえねえもういちどき きたいなわたしがうま れたよること」	文 Jamie Lee Curtis 作者：養親 絵 Laura Cornell	1996 米 国 32頁	絵物 語本 3～8	Adoption	・4歳の女の子は自分が生まれたと きの事、養子を迎えた養親たちが どれほど喜び涙したかなどのお話 を繰り返し聞くことで愛情を実感。
9. The Day We Met You 「あなたに会った日」	文絵 Phoebe Koehler 作者の友人：養 親	1997 米 国 34頁	絵物 語本 0～5	Adoption Babies	・養子を迎える日のためにどれほど 喜びと共に準備をしたか、その経 過を描いている。
10. Over the Moon An Adoption Tale 「月を越えて ある養子 を迎えた家族のお話」	文絵 Karen Katz 作者：養親	1997 米 国 32頁	絵物 語本 2～6	Babies Adoption	・祖父母も含め養子を迎える家族の 喜びを表現している。 ・実際にひとりの養親が養子を迎 えた体験を絵本にしたもの。
11. A Blessing from Above 「天からの祈り」	文 Patti Henderson 絵 Liz Edge	2001 米 国 64頁	絵物 語本 8～	—	・カンガルーのルーママはある日高 い木の巣から生まれたばかりの小 鳥がおなかの袋の中に落ちる。そ の小鳥はルーママを母と慕い親子 になる話。

12. Emma's YUCKY BROTHER 「エマの弟」	文 Jean Little 作者の友人里親 絵 Jennifer Plecas	2001 米国 64頁	挿絵 本 8～	Brothers Sisters Adoption	・4歳の男の子が養子になり、弟として受け入れるまでの困難を描いている。 ・きょうだいとなっていく過程。
13. I Love You Like Crazy Cakes 「私はあなたをとっても愛している」	文 Rose A. Lewis 作者：養母 絵 Jane Dyer	2002 米国 24頁	絵物 語本 4～8	Intercountry adoption Adoption Babies	・シングルマザー・中国からの国際養子縁組の経過を描く。 ・作者の本当の話
14. My New Family 「私の新しい家族」	文 Pat Thomas 絵 Lesley Harker 2003	米国 29頁	絵物 語本 5～7	Adoption	・様々な家族形態がある事 ・養子になることで家族になる課題もあり、説明も必要となる。 ・養子を迎えた家族のサポートグループや支援についての情報付き
15. I Don't Have Your Eyes 「わたしはあなたと同じ目の色ではない」	文 Carrie A.Kitze 作者 養母 絵 Rob Williams	2003 米国 32頁	絵物 語本 2～7	Individual differnces Identity Ethnicity	・異民族の養子縁組 ・外見は親と子どもで似てなくても愛していることと心は同じであること。
16. Eden's Secret Journal The Story of an Older Child Adoption 「エデンの秘密の日記－年齢の高い子どもの養子のお話」	文 Brenda McCreight 作者： 養子専門児童、 家族セラピスト 絵 Sherry Kyle	2003 米国 59頁	挿絵 本 8～	Older Child Adoption	・年齢が大きくなって養子になった子どもに向けての挿絵本。主人公は、エデン13歳で自分の境遇に怒りをもっていた。 ・受け入れられるよう日記を書くようすすめられ、思いを綴る。 ・自分を愛してくれている人たちのことに気づく過程を描く。
17. Why I Chose You – Why Adopting You Made Us a Family 「なぜあなたを養子にして私たちが家族になったか100の理由」	文 Gregory E. Lang 写真と文 Gregory E. Lang & Janet Lankford-moran	2004 米国 126頁	挿絵 本 8～	Adoption	・写真絵本 ・養子縁組についての解説付き ・100家族が1枚の写真とともにそれぞれ養子を迎えた理由を述べている。
18. Borya And the Burps 「Boryaとゲップ」	文 Joan McMaara 作者 養母 絵 Dawn W.Majewski	2005 米国 32頁	絵物 語本 4～8	Orphans Babies Adoption Belching Europe, Eastern	・東欧の子供の養子縁組について。 ・孤児院での生活、縁組の手続きの様子、見知らぬ国に来て子どもとして迎ええられる様子が描かれている。
19. Megan's Birthday Tree A Story about Open Adoption 「メーガンの誕生日の木 オープンアダプションについてのお話」	文 Laurie Lears 絵 Bill Farnsworth	2005 米国 32頁	挿絵 本 4～10	Adoption Mothers and daughters Moving, Household Tree	・オープンアダプションについての解説付き ・生みの親はメーガンが生まれた日に木を植え写真を毎年送っていた。再婚し引っ越すことになった生みの母が木を持って来てくれた。子どもと育ての親と生みの母との交流の様子が書かれている。
20. Three Names of Me 「私の3つの名前」	文 Mary Cummings 絵 Lin Wang	2006 米国 38頁	挿絵 本 6～12	Names Personal Adoption Chinese Americans	・中国から養子に来た少女には3つの名前がある。1つは生みの親が付けた名前、孤児院で子守が呼んだ名前、アメリカの養親が付けた名前、それぞれの名に意味があり彼女にとって大事な名前である。 ・中国から養子に来た子どものための中国文化についての解説付き。

表2. 日本の真実告知絵本

書名	作者	出版年 出版国 頁数	適用 年齢 (歳)	本の内容	
				Key words	絵本の内容
1. 「ふうこちゃんのたんじょうび」	文. はるのみえこ 作者：養親の関係者 絵. なかにしやすこ	2004 日本 33頁	絵物 語本 5～7	真実告知 赤ちゃん返り 生みの母	・5歳の誕生日に母から告知する。 ・子どもの歯（生みの親）から大人の歯（育ての親）へ命のバトンタッチされていること。 ・生みの母の夢をみてから改めて育ての親の子どもとして生まれなおす過程を描く。
2. 「ほんとうにかぞくーこのいえに養子にきてよかった」	文と絵のぐちふみこ 作者：養親	2005 日本 25頁	絵物 語本5 ～7	真実告知 養子 家族	・6歳の時に父からもうひとつの苗字があったことが話される。 ・養子を迎える経過が知らされるが、すべてに反発を覚える。 ・養親が真剣に怒ってくれた時、養父母の愛情に気づく。 ・その後祖父の死や成長していくにつれ、養親家族だけでなく生みの親にも感謝できるようになっていった。

ぞくーこのいえに養子にきてよかった」と養子のことであることが示されているものであった。

(2) 作者名

アメリカの絵本は、1冊を除いて文の作者と絵の作者が違う人であった。文の作者のうち、養親子家族当事者である作者が7人、作者の友人が養親や里親である人が2人、養子専門のセラピスト1名であった。作者の半数が当事者または、何らかの形で養子縁組に関わりある人であった。日本の絵本は、2冊とも養子縁組に直接関係する人によるものである。アメリカ、日本の本ともに、自分の経験や必要性を感じて書き上げた、または養親や養子縁組関係者がいることで刺激を受けて書いたという制作動機が多いことがあとがきからわかった。

(3) 出版年

アメリカの絵本の出版年をみると1978年に出版されたものが1冊と1990年代に出版された本が9冊であった。2000年代の2006年までに出版されている絵本は10冊である。90年代から多様な絵本が出版されてきていることがわかる。2000年に入ってから東洋や東欧などの国際養子について描かれた絵本が増えている。日本の絵本は2005年にはじめて出版されている。それ以前は1990年代後半から2000年にかけて翻訳本が数冊出版されている。

(4) 出版国

著者が絵本の購入した国はアメリカ、カナダ、オーストラリアであったが、それらの絵本の出版国はすべてアメリカであった。日本の絵本は、日本の出版社から出されたものである。

(5) 頁数

絵物語本 14 冊の平均ページ数は、33 ページであった。挿絵本 6 冊の平均ページ数は 61 ページであり、挿絵本の方が言葉による説明が長く内容的にもより詳細な説明がなされているためページ数が増えていた。日本の絵本（絵物語本）は、平均 29 ページであった。

(6) 適用年齢

アメリカの絵本の適用年齢は、0～5 歳 1 冊、2～6 冊 2 冊、2～7 歳 1 冊、3～7 歳 1 冊、3～8 歳 1 冊、4～8 歳 5 冊、5～7 歳 3 冊、4～10 歳 1 冊、6～12 歳 1 冊、8 歳以上が 4 冊であった。総合すると絵物語本が 14 冊と挿絵本が 6 冊であった。絵物語でも 0 歳から読み聞かせできるシンプルな本や 2, 3 歳から長い期間、幅広く読み聞かせられる本があることが特筆できる。日本の場合は適用年齢が表示されていないが、坂本（1977）の分類によると 2 冊とも絵物語本 5～7 歳に相当すると思われる。

(7) キーワード

絵本に表示されているキーワードは、内容の特徴や伝えたい主題を表しているため、それぞれの絵本の特徴として抽出し同類のものをまとめた。それらを大別すると①養子縁組に関する事 ②人に関する事 ③国籍に関する事 ④物に関する事 ⑤状況に関する事に分けられた。① 養子縁組 (Adoption) の項目には、国際養子縁組 (Inter country Adoption), 養親子家族 (Adoptive family), 養親 (Adoptive parents), 高年齢の養子 (Older child Adoption) があげられている。② 人の項目には孤児 (orphans), 生みの親 (Birth parents), 親子 (parents and child), 母子 (mothers and children), きょうだい (brothers and sisters), 母娘 (mothers and daughters), 赤ちゃん (babies) があげられる。③ 国籍に関する事は、東欧 (Eastern Europe), 中国系アメリカ人 (Chinese American) で、④ 物に関する事は、名前 (Names), 木 (Tree), 手紙 (Letters), 玄関 (household), 動物一鳥 (bird) ⑤状況に関する事は、愛 (Love), 個々の違い (Individual differences), 家族生活 (Family life) アイデンティティ (Identity), 民族性 (Ethnicity), 個人的な (personal) があげられた。

(8) 絵本の内容

絵本の内容は、Adesman (2004) の「子どもに養子である事を話すときに配慮する 8 項目」にもとづいて分析し、結果については表 3, 4, 5 にまとめた。

「子どもに養子である事を話すときに配慮する 8 項目」は、以下の通りである。

- ① 養子縁組とは何か。
- ② 養子になった理由。
- ③ 養子を迎えた理由。

表3. アメリカの絵本の内容分析結果

Adesman (2004) の子どもに養子である事を話す時の配慮する8項目	① 養子縁組の意味	② 養子になった理由	③ 養子を迎えた経過	④ 生みの親を非難しない	⑤ いつまでも家族である	⑥ 生みの親に会いたくなかった時	⑦ 子どもが悪いのではない	⑧ 異なる国籍民族の場合
1. Why Was I Adopted? 「どうして私は養子になったの？」	○	○	○	○	○	○	○	○
2. Through Moon and Stars and Night Skies 「月や星、夜空を渡って」	○	○	○	○	○			○
3. A Mother for Choco 「チョコのお母さん」	○	○	○	○	○			○
4. Let's Talk About It: Adoption 「養子縁組について話しましょう」	○	○	○	○	○	○	○	○
5. Did My First Mother Love Me A Story for an Adopted Child 「生んだお母さんは私を愛していたの？ある養子のお話」	○	○	○	○	○			
6. How I Was Adopted Samantha's Story 「どうして私は養子になったかーサマンサの場合ー」	○	○	○	○	○			
7. Happy Adoption Day! 「幸せな養子を迎えた日」	○	○	○	○	○			○
8. Tell Me Again About The Night I Was Born 「ねえねえもういちどききたいなわたしがうまれたよるのこと」	○	○	○	○	○			
9. The Day We Met You 「あなたに会った日」			○		○			
10. Over the Moon An Adoption Tale 「月を越えて ある養子を迎えた家族のお話」	○	○	○	○	○			
11. A Blessing from Above 「天からの祈り」	○	○	○	○	○			○
12. Emma's YUCKY BROTHER 「エマの弟」	○	○	○	○	○			
13. I Love You Like Crazy Cakes 「私はあなたをととも愛している」	○	○	○	○	○			○
14. My New Family 「私の新しい家族」	○	○	○	○	○	○	○	○
15. I Don't Have Your Eyes 「わたしはあなたと同じ目の色ではない」					○			○
16. Eden's Secret Journal The Story of an Older Child Adoption 「エデンの秘密の日記一年齢の高い子どもの養子のお話」	○	○	○	○	○		○	
17. Why I Chose You - Why Adopting You Made Us a Family 「なぜあなたを養子にして私たちが家族になったか100の理由」	○	○	○	○	○			○
18. Borya And the Burps 「Boryaとゲップ」	○	○	○	○	○			○
19. Megan's Birthday Tree 「メーガンの誕生日の木」	○	○	○	○	○			
20. Three Names of Me 「私の3つの名前」	○	○	○	○	○			○

- ④ 生みの親を非難しない。良い親になる準備ができていなかった。
- ⑤ 生みの親は養子を取り戻しにこない（=いつまでも家族である）。
- ⑥ 生みの親に会いたくなかった場合のこと。
- ⑦ 養子になったことは子どもが悪いからではない。
- ⑧ 養子の国籍や民族が養親と異なっても親子である。

ただし、④は原文では養子に障害がある場合、生みの親が見捨てたと考えるかもしれないが、

表4. アメリカの絵本の内容分析結果のまとめ

Adesman(2004)の子どもに養子である事を話すときの配慮する8項目	冊数	絵本の番号
①養子縁組の意味について	18冊	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 19, 20
②養子になった理由について	18冊	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 19, 20
③養子を迎えた経過について	19冊	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 19, 20
④生みの親を非難しない	20冊	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20
⑤いつまでも家族である	19冊	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 19, 20
⑥生みの親に会いたくなった時	0冊	
⑦養子になった子どもが悪いからではない	10冊	1, 4, 6, 8, 10, 12, 14, 15, 16, 19
⑧異民族の場合について書かれている	12冊	1, 2, 3, 4, 7, 11, 13, 14, 15, 17, 18, 20

表5. 日本の絵本の内容分析結果

Adesman(2004)の子どもに養子である事を話す時の配慮する8項目	①養子縁組の意味	②養子になった理由	③養子を迎えた経過	④生みの親を非難しない	⑤いつまでも家族である	⑥生みの親に会いたくなった時	⑦子どもが悪いのではない	⑧異なる国籍民族の場合
1. 「ふうこちゃんのたんじょうび」	○	○	○	○	○		○	
2. 「ほんとうにかぞくーこのいえに養子にきてよかった」	○		○	○	○			

生みの親を非難しない、そして養子に出したのは良い親になる準備ができていなかったからであることを伝えるとあったが、本調査では、障害児のみではなく一般の養子に当てはめて扱うことにした。また⑤は、原文では生みの親が連れ戻しにくることはないという表現であったが、いつまでも養親たちとは家族として暮らすことができることを伝えているという意味に解釈した。

8項目別に、アメリカの絵本の内容分析したものが、表3であり、その結果をまとめたものが表4である。日本の絵本の内容分析をしたものが表5である。アメリカの絵本で8項目全部が含まれている絵本が3冊（No.1, 4, 14）であった。これらは家族は多様であるという視点から社会にはいろいろな家族がいて、養子縁組家族もその中の一つであるというテキスト的な本の形態になっている。8項目のうち2項目しか含まれていない絵本は2冊あった。1冊は養子になった子どもの民族の違いにより外見が違っているが、家族であることを白人と黒人など

いろいろなバリエーションの絵のみに特化して描かれている本である。もう1冊は子どもを家庭に迎えるまで父母はどんな準備をして待っていたかという様子をシンプルに描いたものの2冊（No.9, 15）であった。あとの16冊は5～6つの項目が盛り込まれていた。④の生みの親を非難しないという項目では、すべての本が積極的に生みの親について書いているわけではないが、非難する記述は全くなかった。その中でも生みの母からの手紙という形式で生みの母からの愛情をテーマに表現している絵本（No.5）もあった。⑤いつまでも家族であること、養子を愛していることはすべての本に書かれていた。養子の意味や養子になった理由、養子を迎えた経過などもほとんどの本で取り上げられていた。生みの親についてのより掘り下げた内容の記述や子どもが悪いのでないということに言及している絵本は、年齢の高い子ども用の挿絵本には書かれていることが多かった。⑥生みの親に会いたくなかった時について丁寧に書かれているのは、養子縁組に関する全般的なことが書かれた8歳以上の子ども向けの挿絵本1冊だけであった（No.1）。生みの親とコンタクトを取ることは、主に思春期の本で扱われることが多いため、絵本では扱われることが少ない。アメリカは国際養子や異民族の子どもの養子も多いため、多様な国籍、民族に対応できるが内容の絵本が多くあった。

IV. 考察

絵本は「本としての絵本そのものに焦点をしばって考察すること」と「絵本と人（読者）との関係」（松居 2003：4）から捉える観点がある。ここでは真実告知について描かれたアメリカと日本の絵本の分析から、今後日本における真実告知絵本そのものの課題と、絵本と人との関係の視点から、養親が養子に対して絵本を用いて行う真実告知のあり方について考察したい。

IV-1. 真実告知絵本の課題

(1) 0歳から繰り返し読み聞かせできる絵本

多くの養親にとって、我が子に真実告知を告げることを考えるのは辛いことであり、いつ、どのように言ったらよいかを決めるのは難しい課題となる。告知の時期や内容は子どもの年齢、繊細さ、理解度によるところも大きいであろう。時期は「養子という言葉自体を、子どもが理解する以前に聞かせるほうが良いと考える人」（Melina=1992：73）もいることが指摘されている。さらに「養子縁組について十分に理解できる前にでも子どもは受け入れることができるということを知っておくべきである。養子縁組についてはじめての話は出来るだけ早く話して欲しい。それは日常的な普通の会話の一部として話すようにしてほしい」（Thomas2003：28）と養子縁組の専門家は強調する。本調査からもアメリカの絵本は0歳から、乳児から就学前という表示もあった。筆者がカナダの養親からインタビューした時には、1歳の養子は父親の所にお気に入りの“*I Love You Like Crazy Cakes*”（絵本 No.13）の本を持って来ては読ん

でもらいたがるということであった。その本は、近所の本屋さんに売っていると案内してくれ筆者も同じ本を購入してきた。アメリカでは、子どもが乳児の時から身近に絵本を用意し自然に読みきかせられるよう0歳から幅広い範囲で読み聞かせのできる本が出版されている。0歳からと適用年齢を表示してある *The Day We Met You* (絵本 No.9) は、絵も文もシンプルで、養子を迎えるために、養親が準備した物、ベビーカー、哺乳瓶、おむつ、小さなパジャマや靴下、服、おもちゃなどが1ページずつに描かれ、最後に赤ちゃんの絵とともに「あなたを見た瞬間にあなたをとっても愛していることがわかった」と書かれ、最後に養父母と養子の3人の絵で終わっている。子どもにとって自分が愛され心から待ち望んで受け入れられていることがわかり、わくわくしながら読み聞かせをしてもらっている様子が推測される。

先にあげたカナダの養子のように子どもは何度も何度も繰り返し読んでもらうことを要求することがある。繰り返し読みが生じるのは「思考や情緒の発達が未熟なゆえに、一度や二度の繰り返しでは子どものこころの中に納得のいくような形で読みとれているわけではありません」(佐々木 1993 : 23)といわれるように、子どもの求めに応じて繰り返し読むことは子どもの理解を深めるためには重要な点であることを指摘している。さらに読み聞かせる行為により、子どもとおとなの間に信頼関係が構築され、「子どもにとって絵本とは、それが絵と文を読み取るといったきわめて意識性の高い行為であるだけに、それを読み聞かせてくれるおとなとの基本的信頼関係がまず確立」(佐々木 1993 : 22)されていることが前提であるという。読み聞かせることにより「親と子は言葉を共有し、喜びをわかちあい、互いをうけいれます。この経験は子どもに生きる力を与え、同時に絵本を読む親にも生きがい感と喜びを味あわせて」(松居 2001 : 131) くれるという。日本のある民間の児童福祉機関では「生みの親が尊重されるべき存在」(樂木 2005 : 20)であることが強調され「生みの親は、かけがいのない命を宿らせ、おなかの子の命を育み、命がけで生んだにもかかわらず、子の幸福を願って手放すという苦渋の選択をなした存在として位置づけられていく」(樂木 2005 : 20 - 21) ことにより、生まれたばかりの子どもを迎えた時でも、その時から真実告知は始まっていく。今後、日本でも0歳児から読み聞かせることによって生活の中で自然に養子であることを受け入れられるような絵本が制作されることが必要であると考ええる。

(2) 養子の状況や成長に対応した絵本

養子になった理由や状況はさまざまである。養親になった事情も同じではないであろう。アメリカでは、多様な内容で幅広い段階の適用年齢の絵本が制作されており養親は自分の家族にあった絵本を選ぶことが出来る。子どもに読む前には、絵本のストーリーということだけでなく、おとなにとってどのように話したら心地良いか考えておくことが先である」(Barr & Carlisle 2003 : 329) と指摘されるように、子どもに真実告知をする前の読み聞かせの絵本は、よく吟味して養親の思いにしっかりと合ったものであることが望ましいであろう。日本では、まだ真実告知絵本がなかった時代に、自分の養子のために生き立ちを物語化して絵本に仕立て、

子どもに読み聞かせた養親がいる（川名 2007：428）ことが報告されている。絵本の登場人物と養子の性別や年齢など違いにより若干の修正は仕方ないにしても、迎えた子どもの状況に近い内容で、養親の気持ちを的確に表している絵本をみつけるためにはバリエーションの多様な絵本が必要であると考ええる。

（3）愛情が確認できる内容

アメリカの絵本の内容としては、養子の置かれている境遇についての正確な情報として養子縁組の意味や養子になった理由、養子を迎えた経過が書かれている。その中には生みの親を非難する言葉は全くない。「生みの親を非難することはその子どもである養子をも否定することに繋がってしまいかねないからである」（Adesman 2004：144）。育ての親と生みの親という2組の親がいることが書かれているが、育ての親とはまぎれもなく親子であり、家族なのだということが伝わるように書かれている。年齢の高い子どもの場合、自分が悪い子だったから養子になったと考える子どももいるため（絵本 No.16）子どもが悪いのではないことも伝えられるような文章が入っている。アメリカで出版されている絵本の表紙の裏面には絵本のあらすじとキーワードが掲載されているものが多い。そこに書かれていた状況に関するものは、愛（Love）、個々の違い（Individual differences）、家族生活（Family life）アイデンティティ（Identity）、民族性（Ethnicity）、個人的な（personal）であった。これらは、養親と養子の関係の間に横たわっている課題が示されているといえよう。非血縁の養親と養子の場合、外見の違い、民族性の違いという課題、生みの親と育ての親2組の親をもつ子どもとしてのアイデンティティの確立という課題、個人的なことでありながら社会のスティグマの中で理解されにくい状況であるという課題があると考ええる。それらの課題に対し、絵本は「これまでに心と体に蓄積されていたものが再認識され、同時に未知な言葉や会話や場面や事件やらを、その蓄積にかかわらせながら豊かに認識していく」（岡田 1977：50）可能性が示唆されていよう。そのため、真実告知絵本のストーリーにはさまざまな課題があるが、その中でも養親は心から養子がくるのを待ち望んで、家族として迎え入れ、今幸せであるということが伝えられていることにより、養子であることへの理解と受容が促されていくと考ええる。生みの親からの手紙というテーマで描かれた絵本（絵本 No.5）は、生みの親が妊娠中からどのような思いで子どもを育み、どうしても育てられない事情から子どもにとってもっと大事に愛してくれる人に大切な子どもを託したことが絵とともに描かれている。

これらの絵本の内容に一貫して流れている主題としては、養親は「養子を心から愛している」ことであった。適用年齢の小さい絵物語本時では、シンプルな表現で告知の言葉が表され、年齢が高い適用年齢の挿絵本では、育ての親と生みの親との関係や自分の境遇を受け入れるまでの過程など理解と受容が促されるようなストーリー展開になっている。日本の絵本の場合は、告知を受けてから心の中で葛藤している様子が丁寧に書かれている。生みの親や養親への反発や赤ちゃん返り、養親の子どもとしての生まれなおしの遊びを通して養子であることを受け入れ

ていく過程が描かれている。アメリカの絵本では、年齢の高い子どもには反発、不安が描かれているが、年齢の低い子どもへの絵本では非常に前向きな表現であることは印象的である。年齢の小さい子どもの場合、シンプルなメッセージ「愛していること」「家族であること」が伝えられ、繰り返し読み聞かせてもらうことにより、自分の境遇への理解が進み前向きに受け入れていけるようになると思われる。

IV-2. 絵本を用いた真実告知のあり方

実際に絵本を使つての望ましい真実告知のあり方とその際に生ずる効果について考察を進めたい。

(1) 絵本によりもたらされるものの意義—自己受容

柳田は、「絵本の可能性は広く深い。要は、読む者がどのような状況のなかで、何を求めようとして絵本を手取るかにある」（柳田 2004：3）とし、「絵本とは、魂の言葉であり魂のコミュニケーション」だとする。柳田は、医師が絵本を用いて子どもに死について告知した事例を紹介している（柳田 2004：58）。8歳と6歳のきょうだいは、幼い2歳の弟の死が近いことを理解できず、回復を信じて困惑している状況になかで、母親から頼まれた医師が絵本を使つて子ども達に死についての理解をうながしたのである。医師は「わすれられないおくりもの」（スーザンバーレイ作 小川仁央訳 評論社）というアナグマの死を扱った絵本を使つて、読み終えた後に死に向かっている弟について告知している。「2人の子ども達に死を理解させ受容させるうえで決定的に重要だった」（柳田 2004：58）と述べている。絵本を用いることにより、幼い姉と兄は弟の死の全容は理解しきれていなくても受容しはじめていた。それは「子供達はお話にてでくる人物と自分を同一化する能力に優れ」「それゆえ、実体験と同じ感覚で絵本の世界の中で数多くの経験ができる」²⁾という子どものもつ特性からもわかる。絵本によってその登場人物と自分を同一化して話を聞いていることにより心の準備がなされ、その後養親から話される真実告知も受け入れやすくなると推察される。「ほんとうに大事な肉親の死という、子供にとって一種の限界状況に近い体験の中で絵本がひとつの特別な響きを持って現実の事態を理解する媒体になりえた」のではないかと解説している（柳田 2001：185）。それから4年後、当時6歳だった兄からもらった手紙により「子どもはたとえ6歳であっても、人生で大事なことはしっかりと感じ理解する力を持っている。絵本という表現媒体は、そうした幼少期の秘められた感性と理解力を呼び起こす力を持っているのだ。おとなが子どもと真正面から向き合い語りかけることの何と重要なことか」（柳田 2004：57-58）と子どもの力と絵本の意義について深い感動をもって述べている。真実告知は養親養子の親子にとって、親子だけれど血縁はないことを明らかにする大事な親子関係における限界状況に近い体験といえよう。真実告知の経験により「さまざまな葛藤・悩み・挫折が、新たな『自己』を生み出し既存の自己との対話」（佐々木 2000：73）が行われ、絵本という媒体があることで、養子縁組

のことや養子であることについて客観的に知ることからはじまる。その後で、読み聞かせを受けた子ども自身が養親のお腹から生まれたのではないが、とても待ち望んでいた子どもであり、大事な家族であることが前向きな表現で養親の口から話されることにより、新たな自己とそれまでの自己との対話が始まり、次第に自己受容に転換していく重要な機会であるといえよう。

(2) 告知を助ける絵本の「読み聞かせ」ーアイデンティティの形成

おとなからの絵本の読み聞かせは「絵本の力を最大限に生かす力」（河合 2001：204）であるといわれる。「絵本は、親と子ども、先生と子ども一つまり大人と子どもとが、共に楽しむもの、共に経験を同じくして、同じく成長していくもの」（中川 2006：43）であるという。読み手と聞き手の双方に大きな影響をあたえるものなのである。伝達する大人と伝達される子どもが一つの内容を創造的に享受しているといえよう。幼児の絵本作りに長年取り組んできた松居は、絵本を自分で読むと言葉と挿絵の間にどうしても溝ができると主張する。読み聞かせてもらうことで、挿絵と言葉が直接出会い「子どもの中に生き生きとした物語の世界が見える。ほんとうの絵本の世界が見える。絵本の中に印刷されている挿絵は静止画ですが、子どもの中に見えている絵本の絵は、生き生きと動いている。耳から聞く言葉が絵をどんどん動かし、広げて」（松居 2001：54）いくという。子どもは読み聞かせてもらうことで、絵から直接生き生きと躍動するストーリーを体験しているというのだ。

心理学的視点から絵と読み聞かせの関係を「子どもたちは、自分の知っていることが絵という形であらわされていると、それを見ることによってさまざまな表象をし、そのときおとなが読み聞かせた言葉と結びつけて」（佐々木 1993：31－32）いくという。表象とは、頭の中だけでいろいろなことが思い浮かべられるようになる能力のことである。真実告知絵本の内容を仲立ちにして養親と子どものお話が始まることで「次第に子どもの中で表象能力の発達、人間の子どもの感覚・知覚が単にものの表面的なものにとどまらず、非常に人間化された意味づけ（シンボル化）を内側に含んでいるもの」（佐々木 1993：31）へと進んでいけるものなのであるという。絵本などを使って、自然に養子であることが伝えられていくことにより、真実告知の言葉は子どもの中で、「これまでに心と体に蓄積されていたものが再認識され、同時に未知な言葉や会話や場面や事件やらを、その蓄積にかかわらせながら豊かに認識していく」（岡田 1977：50）と考えられる。養親から生まれたのではなく生みの親がほかにいるという未知の情報と、同時に育ての親からのぞまれ、たくさんの愛情をもって育てられているという話を絵本と養親の口から繰り返し読み聞かせ、語られることで前向きに自己認識して行くことができよう。成長に応じた真実告知絵本をその後も読み聞かせてもらうことで、養子であることをアイデンティティの一部として受け入れ形成されていくと考えられる。

(3) 絵本使った真実告知のあり方—自己肯定感の促進

アメリカでは、乳幼児から真実告知絵本だけでなく家庭での日常会話の中でも、養子という言葉は自然に使われていることが多い。思春期に近づいた子供向けの挿絵本以外、日本のように告知に関しての葛藤はアメリカの物語絵本の中にでてこない。異なる民族や国籍の養子を迎えた絵本にも、外見は異なっても自分たちは親子であり、愛していることが繰り返し書かれている。

日本の絵本では、「子ども（人間）は、すでに獲得している技能や知識、思考方法を越える問題にぶつかったとき困惑し、傷つき、悩み、はては自分でも制御できかねるような感情に振り回される」（佐々木 2000：73）という心の機微を、丁寧に描いている。これは日本の絵本の優れている点であると考えられる。絵本を読み聞かせてもらうことにより、養親と養子の親子関係がこの世の中にはあることを知り、本の登場人物である養子の心の葛藤の軌跡に自分を重ねあわせていく。その後養親の口から真実告知が語られることで、受け入れ易くなると思われる。どの絵本も、決して生みの親を非難することなく、子どもを手放さなければならなかった生みの親の気持ちを汲み取った扱いを絵本ではしている。生みの親を非難することは養子自身も非難されているように感じるといわれている。その上で「生物学上の親と生活を共にできない子どもがこの世の中にはたくさんいること」「2組の親がいても、養育に責任を負い、親子関係が永続的に結びついているのは養親であること」（Melina=1992：77）がストーリーの中に明確に盛り込まれている絵本が多かった。これらの視点から絵本を大人に読み聞かせてもらい、その後自分たちのこととして語られることにより、自分たちの関係が揺るぎないものであることを感覚的にも知覚的にも認識されていき、養子であることも含めた自己肯定感が促進されていくと推測される。

インターネットでソーシャルワーカーが2番目の里子を迎えた里親に絵本をすすめた事例が紹介されていた。

絵本『ねえねえもういちどききたいな わたしがうまれたよること』—どこにでもある親子の様子が楽しい絵と共にえがかれています。子どもは養子でした。この本からもう一冊の養子に関する絵本『おとうとがきた』を編集者から紹介されました。養子の幼い弟が来たのですが、姉のドーラのクレヨンがぐちゃぐちゃにするは、カセットテープは引きだすは、ちょっと困惑気味でもその存在を感じはじめた姉の様子が描かれています。早速、『おとうとがきた』を二番目の子どもを引き取る予定の里母さんにおみせし、上の子にも見せて欲しいとお願いしました。その子はそこにこれからの自分の姿を見いだしたのですが、その後の展開は意外でした。

「私が来た時どんなごんた（筆者注：関西弁でやんちゃな子供の意味）していた？」「そうやね、いろいろあったよ…」といたずらや、困らせたことを話すと、ニコニコとして聞いていたという。自分の記憶のない、親子になった頃のことを何度も聞いたそうです。まさしく、『ねえね

え…』の世界でした。

私は幼い頃、家族のしてくれる「昔話」が好きでした。『昔々あるところにヒロスケという子がいました。』で始まるよくあるパターンです。その「昔話」を心地よく受け入れ、自分の存在を感じたことを今でもよく覚えています。「はーもにい」No.52「巻頭言」より転載³⁾

事例の「いたずらや、困らせたことを話すと、ニコニコとして聞いていた」「自分の記憶のない、親子になった頃の何を何度も聞いた」という養子の様子からも、笑顔で自分が養子に迎えられた頃の事を繰り返し聞くことは、養子の中で自己肯定感が蓄積されていっていると考えることが出来よう。

V. おわりに

日常生活の中で読み聞かせしていけるようにアメリカでは0歳から使用できる絵本もある。日本における真実告知絵本の内容面に関して望ましいあり方として、幼い頃から生活の中で自然に真実告知をしていきたいと考える養親のために0歳から繰り返し読み聞かせができる絵本が必要なのではないかと考える。また養子の状況や成長に対応できるバラエティーに富んだ内容の絵本も必要であろう。それらの絵本を通して養子を取りまくすべての人の愛情が確認できる絵本であることが望ましいと思われる。さらに、絵本を使った真実告知のあり方については、養子の状況や成長に対応した内容の絵本を必要に応じて提供することにより自己受容感が促され、養子である自分というアイデンティティの形成が蓄積されることで、確かな自己肯定感をもてるようになるよう読み聞かせしていくことの重要性が示唆された。

欧米では1970年代から真実告知絵本が徐々に出版され現在では、インターネットでも手に入れることが出来る。日本では、2000年ごろから欧米の真実告知絵本を輸入・翻訳することから始まったが、現在では日本人の手からなる真実告知絵本が出版されるようになってきた。また、自らの手で自分の家族のために真実告知絵本を作成している養親や、インターネットでみつけた養親の書いた英語の詩に感動し、自分で翻訳し「ふたりのおかあさんからあなたへのおくりもの」という題名で絵本を出版した養親（いいたか2007）も現れている。絶対数の少なさもあると思うが、日本では養親が求める真実告知絵本の需要に供給が追いついていない状況であることがわかる。今後ますます真実告知絵本の必要性は高まっていくであろう。そのためには多様な状況、発達状態に対応できる絵本の作成と、一般の書店でも手軽に入手できるように働きかけていくことも大事であると考えます。

アメリカの養子縁組の専門家は「絵本があなたの子どもに告知をする勇気を与えるであろうことを望む。この絵本が教えるのではなく、この絵本を使ってあなたから伝えるのである。絵本とは、あなたの子どもの性別や事情も違うかもしれないが、この絵本を読み聞かせることで、養子縁組に関しての経験をあなたの養子に話すことができることを願う」（Cole1995：4）と

助言している。絵本を使う際に大事なことは、絵本が子どもに真実告知をしてくれるのではなく、絵本を使っておとな（養親）が真実告知をすることをきちんと理解しておくことである。「子どもに養子であることを伝える前に、あなたが言いたいことを練習しておいてほしい」（Thomas 2003：28）とあるように、入念な準備は欠かせないであろう。その上で養親だけで抱え込まないで「必要な時は養子縁組機関に相談すること」（Thomas 2003：28）も薦めている。真実告知は子どもに絵本を使って1回告知をすれば良いのではなく、始めの告知がスタートであり、成長するにつれ子どもの求めに応じた詳細な告知を何度も行っていくという視点を持たなければならない。そのために、アメリカでは多様な内容で幅広い適用年齢の本が出版されている。アメリカで行われているようにこれらの手順をふまえて日本の民間の児童相談機関のみならず、公的機関である児童相談所でも「できるだけ早く」、「日常生活の一部」として絵本を使って真実告知に踏み出すことができるよう養親への支援の手が差し伸べられることは非常に重要あると考える。

今後の課題としては、絵本を使って真実告知をした事例を集め、実践に即した真実告知のあり方を研究していきたいと考えている。

注

- 1) 「アメリカの養子縁組関係図書販売のホームページ」
<http://www.com.comeunity.com>, <http://www.tapestrybooks.com>, <http://adoptionshop.com>
- 2) 「おはなし絵本クラブ」<http://www15.ocn.ne.jp/~aijyou/ehonnosekai.html>
- 3) 「社団法人 家庭養護促進協会」は日本国内で唯一の里親探し専門の民間の児童福祉団体で、事務所は神戸と大阪の2ヶ所にある。里親を求めている子どもを新聞・ラジオで紹介する里親開拓＝「愛の手運動」を行っている。「愛の手運動」は児童相談所、新聞社、放送局、さらに多くの方々の協力を得て、神戸では昭和37年から、大阪では昭和39年から始まった。
<http://www5f.biglobe.ne.jp/~ainote/>

引用文献

- Adesman, Andrew M.D. (2004) *Parenting your Adopted Child*, McGraw-Hill.
- 岩崎美枝子 (2001) 「児童福祉としての養子制度—家庭養護促進協会からみた斡旋問題の実情—」『養子と里親-日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題』養子と里親を考える会編湯沢湯沢雍彦監修 日本加除出版：57-79.
- Eldridge, Sherrie (1999) *Twenty Things Adopted Kids Wish Their Adoptive Parents Knew*, Adell Trade Paperback .
- 岡田純也 (1977) 「絵本」『児童文化』編著者滑川道夫・中川正文 東京書籍, 45-53.
- 家庭養護促進協会 (1991) 『真実告知事例集うちあける』家庭養護促進協会大阪事務所
- 家庭養護促進協会 (1999) 『大人になった養子たちからのメッセージ』家庭養護促進協会大阪事務所
- 家庭養護促進協会 (2004) 『里親が知っておきたい36の知識』家庭養護促進協会神戸事務所
- 家庭養護促進協会 (2006) 『真実告知ハンドブック』家庭養護促進協会神戸事務所
- Keefer, Betsy and Schooler, Jayne E. (2000) *Telling the truth to your adopted or foster child*, Bergin&Garvery
- 川名はつ子 (2007) 「子どもの社会的養護におけるライフストーリーワークの重要性」日本社会福祉学会第5回全国大会報告要旨集

養子になった我が子に伝えたいこと（森和子）

- 河合隼雄 松居直 柳田邦夫（2001）『絵本の力』岩波書店
絆の会編（1997）『家族作り－縁組家族の手記』世織書房
古澤頼雄，富田康子，鈴木乙史，横田和子，星野寛美（1997）「養子・養親・生みの親関係に関する基礎的研究－開放的養子縁組（Open Adoption）によって子どもを迎えた父母－」『安田生命研究助成論文集第33号：134-142
古澤頼雄，富田康子，石井富美子，塚田・城みちる，横田和子（2003）「非血縁家族における若年養子へのテリングー育ての親はどのように試みているか？」中京大学心理学研究科・心理学部紀要 第3巻第1号，1－6。
Kroger, Jane, 2000, *Identity Development: Adolescence through Adulthood*, Sage Publication, Inc.. (=榎本博明編訳（2005）『アイデンティティの発達－青年期から成人期－』北大路書房）
坂本一郎（1977）『絵本の研究－6歳児の親近語彙付－』日本文化社。
佐々木宏子（1993）『新版絵本と子どものこころ 豊かな個性を育てる』JULA 出版局。
佐々木宏子（2000）『絵本の心理学 子どもの心を理解するために』新曜社。
鐘幹八郎,山本力,宮下一博（1996）『アイデンティティ研究の展望Ⅲ』ナカニシヤ出版。
鐘幹八郎,山本力,宮下一博（2002）『アイデンティティ研究の展望Ⅵ』ナカニシヤ出版。
永井憲一・市川昭午監修（1996）『子どもの人権辞典』エムティ出版。
中川正文（1997）『児童文学を学ぶ人のために』世界思想社。
中川正文（2006）『絵本・わたしたちの旅立ち』NPO 法人「絵本で子育て」センター。
Melina, R.Loïs（1986）*Raising Adopted Children*, Harper&Row Publishers,Inc. (=伊坂青司・岩崎暁男訳（1992）『子どもを迎える人の本－養親のための手引き』どうぶつ社)
Barr, Tracy, Carlisle, Katrina（2003）*Adoption for Dummies*, Wiley Publishing,Inc..
Hoops, Janet L.（1990）*Adoption and Identity Formation*, “The Psychology of Adoption”, Oxford University Press : 144 – 166。
松居直 2003『絵本のよこび』日本放送出版。
森和子（2005）「養親子における『真実告知』に関する一考察－養子は自分の境遇をどのように理解していくのか－」、『文京学院大学人間学部紀要』Volume7, No.1 : 61-88 .
柳田邦夫（2004）『砂漠で見つけた1冊の絵本』岩波書店。
樂木章子（2003）「施設で育てられた乳幼児との養子縁組を啓発する言説戦略－ある養親講座の事例研究－」、『実験社会心理学研究』第42巻第2号：146－165。
樂木章子（2005）「血縁なき親子関係をつくるネットワーク－NPO 法人『環の会』の事例研究－」、『実験社会心理学研究』第44巻第1号：15－26。
Watkins, Mary and Fisher, Susan M.（1993）*Talking with Young Children about Adoption*, Vail-Ballou Press.
Wine, Judith（1995）*Canadian Adoption Guide – A Family at Last*, McGraw-Hill Ryerson.

参考図書

- Livingston, Carole Illustrated by Robins, Arthur（1978）WHY WAS I ADOPTED ?, Kensington Publishing Corp.. (= 2003, 庄司順一訳『どうして私は養子になったの?』明石書店.)
Turner, Ann Illustrated by Hale, James Graham（1990）, *Through Moon and Stars and Night Skies*, A Charlotte Zolotow Book.
Kasza, Keiko（1992）, *A Mother for Choco*, Paperstar.
Rogers, Fred Photographs by Jim Judkis（1994）*Let's Talk About It*, The Putnam & Grosset Group
Miller, Kathryn Ann Illustrated by Jmi Moffett（1994）*Did My First Mother Love Me A Story for an Adopted Child*, Morning Glory Press
Cole, Joanna Illustrated by Chambliss, Maxie（1995）*How I Was Adopted Samantha's Story*, Morro Junior books

- McCutcheon, Jahn Illustrated by Julie Paschkis (1996) *Happy Adoption Day!*, Little Brown And Company
- Curtis, Jamie Lee Illustrated by Cornell, Laura (1996) *Tell Me Again About the Night I Was Born*, The Manitoba Library Association. (= 1998, 坂上香訳『ねえねえもういちどききたいなわたしがうまれたよること』偕成社.)
- Koehler, Phoebe (1997) *The Day We Met You*, Aladdin Paperbacks.
- Katz, Karen (1977) *Over the Moon An Adoption Tale*, Henry Holt and Company.
- Henderson, Patti Illustrated by Liz Edge (2000) *A Blessing from Above*, A Golden Book.
- Little, Jean Illustrated by Jennifer Plecas (2001) *Emma's YUCKY BROTHER*, Harper Trophy.
- Lewis, Rose Illustrated by Jane Dyer (2002) *I Love You Like Crazy Cakes*, Little Brown And Company.
- Shulman, Dee (1993) *Dora's New Brother*, The Bodley Head Children's Book. (= 1996, もとしたいづみ訳『おとうとがやってきた』偕成社)
- Thomas, Pat Illustrated by Lesley Harker (2003) *My New Family*, Barron's.
- Kitze, Carrie A. Illustrated by Rob Williams (2003) *I Don't Have Your Eyes*, EMK Press.
- McCraith, Brenda Illustrated by Sherry Kyle (2003) *Eden's Secret Journal The Story of an Older Child Adoption*, Adption Press.
- Lang, Gregory E. Photographs by Gregory E. Lang & Janet Lankford-moran (2004) *Why I Chose You-Why Adopting You Made Us a Family*, Cumberland House Publishing Inc..
- McMaaraDawn, Joan Illustrated by W.Majewski, (2005) *Borya And the Burps*, Perspectives Press,Inc..
- Leers, Laurie Illustrated by Bill Farnsworth (2005) *Megan's Birthday Tree A Story about Open Adoption*, Albert Whitman & Company.
- CummingsLin, Mary Illustrated by Wang (2006) *Three Names of Me*, Albert Whitman & Company.
- はるのえみこ・なかにしやすこ絵 (2004) 『ふうこちゃんのたんじょうび』くろしお出版。
- のぐちふみこ (2005) 『ほんとうにかぞくこのいえに養子にきてよかった』明石書店。
- いいたかもとこ訳 しもかわくみこ絵 (2007) 『ふたりのおかあさんから あなたへのおくりもの』家庭養護促進協会大阪事務所。

(2007.12.12 受理)